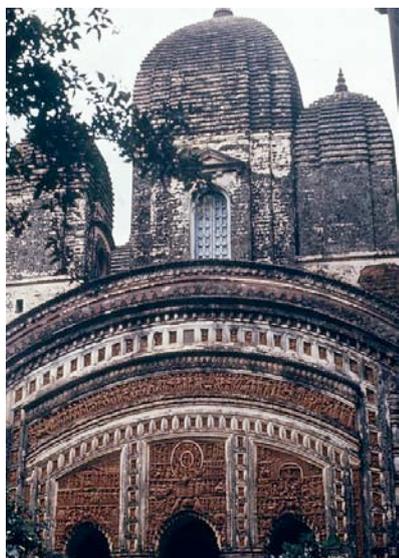


## トピックス 1. 1943 ベンガル大飢饉とアマルティア・セン経済学

How the Bengal Famines 1943 was Mirrored in the Mind of Amartya Sen, the Nobel Prize Economist

### 写真画像



①テラコッタ寺院正面



②テラコッタ寺院壁画の一部接写



③テラコッタ寺院正面の一部接写

### 画像出所

アジア経済研究所図書館 「開発途上国フォト・アーカイブス」、「フォト・エッセイ：1960年のインド：「変化」の予兆を写す」

(写真撮影・執筆：田部昇 元アジア経済研究所理事・明治学院大学名誉教授)

## 説明

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが少年時代を過ごしたビルブム/スルール村には大小合わせて20のヒンドゥー教寺院がある、多くは17～18世紀建立といわれ、ヒンドゥー教の神話・故事の物語性豊かな、美しいテラコッタ壁画で装飾される。この一帯も1943年ベンガル大飢饉の悲劇に見舞われた地域。ここに大飢饉の爪痕を記す刻印を見た。

-----

1943年、第二次大戦下の英領インド ベンガル地方に300～350万人の餓死者をもたらしたベンガル大飢饉の悲劇はすでに歴史の一部となり、記憶のなかの残像でしかない。しかし、この出来事は半世紀余を経て、ひとりのベンガル人経済学者によってその真実の意味が問われ、理論化された一連の研究によって人類への知の教訓となった。ノーベル経済学賞受賞者アマルティア・セン (Amartya Sen) (1933-)がその人である。\*

### 1. 少年アマルティア・センは何を見たのか：

少年の生まれ故郷はカルカッタ（現コルカタ市）の北、ビルブム村 (Birbhum)。ここに、詩聖R. タゴール創設のシャンティニケ-タン大学、通称タゴール大学がありこの緑溢れるキャンパスが彼の生家でもある。1943年、10歳の少年はこの村で自分の目で大飢饉の惨状をつぶさに見聞き、不可思議な光景に気がついたという。同じ村のなかで食料に欠乏し次々と倒れていく一群の人々がいる。ほとんどが土地を持たない農業労働者など経済的貧困層の人たちである。一方では土地所有の農民や米穀流通業者、そして地主など一群のエリート層はまったく食事にこと欠くことはなかった。村全体としては米の保有量は決して飢餓状態ではなかった。何故か。初等高学年の少年にはこれを理解することが出来なかった、とノーベル賞受賞記念講演(1998年)の中で回想している。彼の講演内容はその後、電子版「自伝 (Amartya Sen—Autobiography)」として公開されたので当該回想部分を以下に訳出する。\*\*

「1943年ベンガル大飢饉の記憶は今も強く、鮮明に残っています。200万人とも300万人ともいわれる人々が死亡した出来事をシャンティニケ-タン (Santiniketan) の村から見ていたのです。それは完全に階層特定型の特徴\*を持っていることに驚愕したものです。というのは、私の通う学校の友人、その家族・親戚の家族にはこの大飢饉の間、誰一人として困窮した者はいなかったのです。この飢饉では中流階級の下層の人々さえ被害を受けたものはいませんでした。最下位にある経済階層の人々たち、つまり農村の土地無し労働者たちだけが飢餓の被害を受けたのです。」

(注記\*は原文 thoroughly class -dependent character の仮訳).

この回想を読むと、10歳の少年の目には自らが生活する村落社会が経済的には土地所有の有無・規模によって階層化されている現実を認めていることがわかる。さらには、社会構成、つまりカースト帰属意識の階層化が固定している社会であることも認識している。かれは経済的にも、社会的にもヒンドゥー社会の最高位の階層に属する家庭に生まれ、まさに恵まれた少年時代を過ごした。そのような背景を持つ少年は大飢饉を食料（米穀）の絶対量不足としてではなく、階層間配分の不公平の問題と直感的に理解したに違いない。その後、彼はカルカッタに移り、名門プレジデンシー・コレッジ（Presidency College, Calcutta University）（1951～1953）、さらにはケンブリッジ大学 トリニティー・コレッジ（Trinity College, Cambridge University）に学ぶ。この間にどのようなケンブリッジ学派経済学の影響を受けたかは自伝に紹介されているが、経済集計量を扱うマクロ経済学よりは経済主体のミクロ経済学に深く傾斜していく。かれの方法的認識には幼少のころ体験したベンガル大飢饉の姿が大きく影響していると思われる。

## 2. 青年アマルティア・センはどう考えたか：

わたくしは偶然の機会に同年齢の青年学者アマルティア・センと歓談することになる。1960年、私の研究留学先、インド統計研究所（Indian Statistical Institute, Calcutta）（現インド統計大学）の所長P. C. マハラノービス教授（P.C. Mahalanobis）主催の夕食会でのことである。研究所内の教授私邸で催された食事会には日本からの来訪者、推計学の権威（故）増山元二郎先生のほか、研究所ゲストハウスの長期滞在者としてJ.B.S.ホールデン教授（イギリス人生物学者。後にインド国籍取得・帰化）、そして私と妻が招待された。もう一人所長夫妻と親しげに会話を交わしている若いインド人の青年がいた。ケンブリッジ大学で学位請求論文執筆中、カルカッタに新設のジョドゥプール大学（Jadavpur）経済学部の教授と自己紹介された記憶がある。かれはベンガル人貴族階級（ブラーマン）の特徴ある顔立ち、立ち振る舞いの青年、のちにノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・セン教授の若い姿である。かれの生まれはシャーンティニケターン大学キャンパスと聞いて、わたくしもカルカッタ到着後まもなく訪ねたこともあり、ふたりの会話は弾んだ。ここでマハラノービス教授はわたくしたちの会話に割り込むようにして、1943年ベンガル大飢饉の講義を始めた。わたくしはこの出来事についてまったくの無知であった。第二次大戦中の英領インドの出来事でありその事実を知る由もない。今も現代史の教科書では戦時中の国内事件として短く記述される程度に過ぎない。わたくしの記録ノートにはおよそつぎのような内容が記されている。

「当時、カルカッタの港湾施設は旧日本空軍の爆撃によって破壊され、船舶等の運送手段がほぼ壊滅状態になった。「ベンガル大飢饉」は米穀類の絶対量の不足からではなく、ビルマ（現ミャンマー）からの輸入米を内陸部へ輸送する手段が破壊されたことが主たる原因だという。大飢饉は人々の想像を絶する規模でベンガル農村部を襲い、多数の村が消滅するなど餓死者の屍累々の惨状であった。これは天災ではなく人災だ。戦時下とはいえ、問われるべきことは餓死迫る数百万人の農民にたいし英領インドの為政者は何らの手を打たず、都市住民は無関心であり、米穀取引商人は貪欲な買占めに走った。・・・」\*\*\*

マハラノービス教授は「飢餓」研究を研究所の重要な学際プログラムとしてすでに多分野の研究者を集めていた。教授自身は推計学の手法を使って「大飢饉発生の周期性」、医学者グループは「ベンガル人の、大飢饉による体力劣化、および将来に及ぼす影響に関する数量的・統計的研究」、また、経済計画のグループは「飢饉と人間生存の最低条件」、など重点的に研究を進めようとしていた。青年教授アマルティア・センはこのころ、経済学の純粹理論から応用問題への関心を持ち始めたようで、マハラノービス教授はすでに将来を囑望されたアマルティア・センを「ベンガル大飢饉」の研究に取り込もうとしたに違いない。彼はその直後、カルカッタを逃れるようにして、デリー・スクール・オブ・エコノミクス (Delhi School of Economics)、さらにアメリカ、イギリスの名門大学へと活動の場を移すことになった。少年時代の記憶が彼をベンガルの地から遠ざけたのかも知れない。

彼の履歴書には、出生年：1933年、出生国：英領インド(British India)とある。確かに独立国インドではない。しかし、イギリスの植民地英領インドを出自のアイデンティティーとする学者はあまりいない。いや、彼一人かもしれない。政治意識や感受性の強いベンガル人にとって<植民地英領インド>の言葉さえ嫌悪の念を示すのだが、彼の深層心理を知りたいものだ。

### 3. アマルティア・センの生地ビルブム村で見たもの

ところで、ベンガル大飢饉の悲劇(前項2)を知り、その史実を村レベルで、しかも直接この目で見たい衝動にかられ、ビルブム、スルールの村々を訪ねた。これらの土地に詳しいベンガル人郷土史家の懸命な聞き込みの甲斐があって、ヒンドゥー教壁画寺院の一つを見つけることができた。それは中規模の、ほぼ廃寺となった状態で風雨にさらされ朽ち果てようとしていた。その壁面に埋め込まれた石造板があり、小さな刻印はベンガル年号1943と判読不明の数文字があるだけの、いまにもこの世界から消滅しようとする姿を見た。その近くにテラコッタ壁画に装飾された荘厳な古寺が立つ。冒頭に掲載の【写真画像】がそれである。私の記録ノートには短く、つぎのような村人の言葉が書き綴られている。

「この一帯の村から人間はいなくなった。みんな山から下って住み着いた住人だ。ヒンドゥー教徒ではないけど、かわいそうだからこのあたりで荼毘に付して天国へ返したよ。その印だよ。」

サンタル族の農民のことをいうのだろう。ヒンドゥー社会の外側に位置づけられ、経済的には土地なし農業労働者、村々のあらゆる雑業を担う労働者、差別・偏見・虐待に耐えて生きる非抑圧の民。しかし、民俗絵画や音楽、手芸に優れた民。19世紀半ば、「1855年サンタルの反乱」では山岳民族の唯一の武器、<弓と矢>を手近代兵器で武装した英印軍と戦い、反植民地闘争の先駆けとなる果敢な行動をとった民である。

アマルティア・センの用語を使うと、「完全に階層特定型の特徴」の「1943年ベンガル大飢饉」は真っ先に、これら住民を抹殺したに違いない。ヒンドゥー社会の周辺域に暮らす貧困農民たちである。かれの経済学認識を培ってきたベンガル大飢饉の歴史事実は心重い記憶でもあるが、その真実の意味を探し当てた洞察力と論理構築の力量にあらためて敬意を表したいと思う。

## 関連資料

\* Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation, London, Clarendon Press, 1982. 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』（岩波書店、2000）

\*\* “Amartya Sen – Autobiography”, Nobelprize, org. 2 Dec 2011

\*\*\* 田部昇著『インド 児童労働の地をゆく』（アジア経済研究所 2010年）第5章「カルカッタのスラムと児童労働」の中の記述。155～158ページ。